



TITLE:

# 京大東アジアセンターニューズレ ター 第615号

AUTHOR(S):

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター

---

CITATION:

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター. 京大東アジアセン  
ターニューズレター 第615号. 京大東アジアセンターニューズレター  
2016, 615

ISSUE DATE:

2016-04-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/210197>

RIGHT:

2016 年 4 月 11 日発行 第 615 号

## CONTENTS

「中国経済研究会」のお知らせ .....	2
読後雑感:2016 年 第 7 回<小島正憲> .....	3
中国の中・東欧協力<福喜多俊夫> .....	7
【中国経済最新統計】 .....	11



## 「中国経済研究会」のお知らせ

---

2016年度第1回（通算第55回）の中国経済研究会は下記の要領で開催することになりましたので、ご案内いたします。大勢の方のご参加をお待ちしております。

記

**時 間：** 2016 年 4 月 19 日（火） 16:30－18：00

**場 所：** 京都大学吉田キャンパス・法経済学部東館地下1階 みずほホール  
AB

**テーマ：** 「経済循環」から見る中国のマクロ経済(仮題)

**報告者：** 岑 智偉(京都産業大学経済学部教授)

注：本研究会は原則として授業期間中の毎月第3火曜日に行いますが、講師の都合等により変更する場合があります。2016度における開催(予定)日は以下の通りです。

前期：4月19日（火）、5月17日（火）、6月21日（火）、7月19日（火）

後期：10月18日（火）、11月15日（火）、12月20（火）、1月17日（火）

（この研究会に関するお問い合わせは劉徳強（[liu@econ.kyoto-u.ac.jp](mailto:liu@econ.kyoto-u.ac.jp)）までお願いします。なお、研究会終了後、有志による懇親会が予定されています。）

## 読後雑感 : 2016年 第7回

---

05. APR. 16

アジア・アパレルものづくりネットワーク代表理事

株式会社小島衣料オーナー

東アジアセンター外部研究員 小島正憲

- 1.「老人の壁」 2.「ほんとうに70代は面白い」 3.「幸福に死ぬための哲学 池田晶子の言葉」  
4.「ひとり終活」 5.「老いを自由に生きる」

### 1.「老人の壁」 養老孟司・南伸坊対談 毎日新聞出版 2016年3月25日

帯の言葉 : 「壁を越えたら、自分がいました。 南:もう楽しいことをあとまわしにしないでいいんですね。養老:楽しいことだけやればいいんです。」

本書は「バカの壁」で巷を賑わした養老氏と、老人問題をポジティブに扱う南氏との対談なので、きっと、大胆な発想

で「老人の壁」を突破し、超高齢社会からの脱出の道を指し示してくれるにちがいないと思い読んでみた。しかし期待外れだった。残念ながら本書は、二人の老人の雑談の域を出ていない。それでも参考になる個所はあったので、以下に記しておく。

- ・養老:(健康診断には)行きません。これはもうはつきりしています。健康診断を受けても受けていなくても、平均寿命は変わらないという調査結果はきちんと出ています。
- ・養老:「75歳以上になったら積極的な治療はやめよう」って言っている医者がいましてね。それは確かに、僕もずっと前からそう思っていたから、病院へ行っていないんです。
- ・養老:結果的に人間の寿命は延びていきますけど、「延びたから幸せになったのか」ということもあります。現代社会でまともに生きようとすると、生きそびれるんじゃないかと思いますね。「ああなったらどうしよう。こうなったらどうしよう」って全部先送りしますから、「ああすればこうなる。今度こうすれば、ああなる」とかやっていけるうちは、それでいいんですけど、それをやっていると、「はて、おれはなんで生きてるんだろう?」ということになりませんか。自分の生き方が予測できるんですから、そんな人生って、じつは、ぜんぜん面白くないですよ。そうすると、何十年生きて、生きてなかったのとほとんど同じような感じですね。80とか90になっても、「しにたくねえ」という考えになる。全部、先延ばしにしてきたから、まだ先があるような気がするんです。
- ・南:確かに何でもかんでも、生きているほうがいい。とにかく息をしているだけでも生きているほうがいいという考え方、どうしてできちゃったんですかね。「どうせこのぐらいの年になったら死ぬんだ」っていうのが普通だったときは、諦めていられたものがね、「何とかすれば、息だけしてることはできますよ。どうします?」ってなると、それ、「やんなくていい」いえないんですよ。きっと。
- ・養老:老人の生き方というのは、60歳を過ぎたらバラバラなんです。脳というのは、ある年齢までは若いときと同じ重さですが、60歳を過ぎると、小さくなる人と、まったく変わらない人で、ばらけるんです。だから年寄りの生き方って一律に言えないんですよ。個人差がもろに出てくるんですよ。

## 2. 「ほんとうに70代は面白い」 桐島洋子著 海竜社 2015年4月15日

帯の言葉：「聡明な女は素敵に老いる」

桐島氏(今年で79歳)は、本書で、「70歳代はほんとうに面白かった」と振り返っている。そして自らを聡明な女と称し、バンクーバーと東京の二重生活を謳歌した10年を、「素敵な老い」として書き綴っている。確かに本書からは、「老いの暗さ」はまったく感じない。しかし桐島氏の自慢話が多く、本書は一般の高齢者にはあまり参考にはならないし、受け容れられることもないだろう。

桐島氏は、「本当に余暇が面白くてたまらない時代に、わたしたちは生まれ合わせたのである。ラッキーなことではないか」と書いているが、それは、日本国家の1000兆円超の借金や福島第一原発のような負の遺産を、次世代に先送りしているから可能なことなのである。桐島氏には、「それらを解決する責任が、自分たちにある」という認識がまったくない。自分たちだけ「余暇を面白く楽しみ」、それを「ラッキーだ」と言い切る桐島氏の姿は、高齢者の最悪パターンである。私はこんな70代にはならない。私は、現在、高齢者に課せられている任務は、「負の遺産を次世代に先送りせず、自分たちの手で解決する」ことだと考えている。それを実現するために、70代を捧げるつもりである。

桐島氏は、「老人介護問題については、幸か不幸か私は全然その経験無しに過ごしてきた」、「“私は遠慮なくあなたたちの世話になるからね、覚悟しなさいよ”と子ども達に言い渡しておこう」などと書いているが、こんな鼻持ちならぬ親の介護を押しつけられた子ども達は、ほんとうに迷惑するだろう。これなどまさに、老老介護の修羅場をまったく知らない、脳天気な発言である。

なお、桐島氏は本文中で、「**インド仏教**には人生の四季を棲み分けようという“四住期”の教えがあり、……」と書いているが、“四住期”は**バラモン教の教え**であり、その思想を釈迦が仏教に取り込んだのである。

## 3. 「幸福に死ぬための哲学 池田晶子の言葉」 池田晶子著 講談社 2015年2月23日

帯の言葉：「悩むな、考えよ。人生を考えるヒント」

本書は、2007年に若くしてガンで亡くなった池田氏の過去の著作の中から、テーマごとに文章を抽出して、編纂されたものである。したがって論理的に一貫した哲学書ではなく、いわば名言集といった類いの書であり、読みやすい。しかし残念ながら「幸福に死ぬための哲学」という題名にふさわしい名言は、少ない。それでも下記の文章などは、面白かった。

池田氏は、「結局のところ、“死”こそが、人間にとっての最大の謎であり、したがって、また魅惑なのだ。少なくとも私は、そうである。言葉と論理、すなわちすべての思考と感覚が、そこへと収斂し断絶し、再びそこから発出してくる力の契機としての“死”。この人生最大のイベント、これの前には、生きんがためのあれこれなど、いかに色あせて見えることか。死を恐れて避けようとし、生きんがためのあれこれのために生きている人は、死を考えつつ生きるという人生最高の美味を逃していると言っている」と書いている。私は近年、いつも死を考えつつ生きているが、人生最高の美味を堪能しているとは、とても言えない。どのようにしたら、この心境に到達できるのだろうか。

池田氏は、「外なる規範としての道徳は、常に、“べき”とか“せよ”とか“ねばならぬ”などの規



則や戒律の形をとる。したがって、それを行為する者には必ず強制や命令として感じられる。これに対して、内なる規範としての倫理は、たんに“そうしたい”という自ずからの欲求である。たとえば、“悪いことはしてはいけないからしない”、これは道徳であり、“悪いことはしたくないからしない”、これが倫理である。“善いことはしなければいけないからする”、これが道徳であり、“善いことをしたいからする”、これが倫理である。この考えは面白く、私の頭の整理にも役立った。

池田氏は、「生命保険は、いつか必ず死ぬというわかっていることに掛けるもののように見えるが、いつ死ぬかはやはりわからない。保険とは、お互いが、いつ死ぬかというわからなさに賭ける一種の博打だというのなら、私のような者でも納得できる。博打には博打の腹の括り方というものがある。博打に統計を持ち込むのは、姑息であるか、野暮である。科学技術とは、わからないことをわかったと思わせる一種の詐術である。しかし、人生は、わからないから生きられるのである」と書いている。これも面白い考え方である。

池田氏は、「そもそも私たちは、自分の決断で生まれたわけではなく、自分の決断で死ぬのでもない。生まれて死ぬという、人生のこの根本的な事態において、私たちの意志は全然関与していない」と書いている。私は、これについては同意できない。なぜなら、死は自分の決断で行うことができるからである。この点の錯誤が、池田氏の哲学の最大の欠陥なのではないか。

#### 4. 「ひとり終活」 小谷みどり著 小学館新書 2016年4月6日

副題：「不安が消える万全の備え」 帯の言葉：「後悔しない、迷惑をかけない“自分の人生”のしまい方」

本書で小谷氏は、「終の住処をどう選ぶ？ 認知症になったら誰を頼る？ 延命治療を受けるか？ 葬式や墓はどうしたい？ 遺品の整理は誰に頼む？」などについて、詳しく述べている。私は本書を読んで、いまさらながら、ほんとうに日本における「死」は面倒なものだと思った。そして同時に、「やがてくる団塊の世代の大量死の中で、死にまつわるいろいろなことがもっと簡素化されていくのではないだろうか。たとえば最近、盛大な葬儀が家族葬に、さらに直葬に変わって行っているように。また、「死」にまつわるいろいろなことが、簡単な外国はどこだろうか。きっと次には、そのようなことを調査した本が出るのではないか。あるいは「死」を外国で迎えるツアーなども催行されるのではないか」と思った。私は少し前に、妻と相談して、遺言状を書いたが、この書を読んで、とくに補充しなければならないことはなかった。

小谷氏は、「本書を読んでいただいた後、生前どんなに準備したとしても、人はひとりでは死ねないということに気づいていただきたいというのが、私の願いです。自分の人生を自分らしく終えるためには、どんな人も誰かに意思を託したり、それを実行してもらったりする必要があります。誰にも手間をかけずに人生を全うすることは絶対にできません。つまり、ひとりで死んでいくことはできないのです」と書き、また「自分らしい生き方の延長として死の迎え方や死後について考えたり、自己決定しておこうという意識も台頭しています。しかしそもそも、自分の死を自己決定することはできるのでしょうか。死の自己決定は、①死の迎え方に関する自己決定と、②葬送や墓など死後の処遇に関する自己決定に分類できます。そのうち①については、たとえば治療の見込みがなく、死期が迫っている場合に延命治療をどうするかを自己決定することの是非に疑問を持つ人は少ないでしょう。しかし、死ぬ権利を認めるのかについては議論が分かれるはずで、自殺することを自己決定した場合、まわりの人は自己決定だからと受け入れるべきなのか、と

いった問題です」と書いている。私はやがて、このあたりの考え方も、「自殺という自己決定を認める、あるいは“楽しく死ぬ”のならば、それを認める」などといった方向に変化するものと考えている。

小谷氏は、「年をとると、自分のことが自分でできなくなったり、生活をするのに誰かのサポートが必要になったりと、自立するのが難しくなっていきます。そのことが、一人暮らしの人の不安のタネにもなっている」と書き、自立の必要生を説き、自立を、「①身体的自立、②経済的自立、③生活的自立、④精神的自立」に分類して述べている。

## 5. 「老いを自由に生きる」 アルボムツレ・スマナサーラ著 だいわ文庫 2015年3月15日

副題：「とらわれない・持たないブッダの智慧」 帯の言葉：「“今を生きる”と心の老化が止まります」

本書の「はじめに」でアルボムツレ氏は、「大乘仏教も上座部仏教も、仏教であることに変わりはありませんが、一つ大きな違いは、上座部仏教が、お釈迦さまの時代から伝えられてきたパーリ語の経典を元にしてしている点です。パーリ経典には、日本に伝わった大乘仏教経典が持つ“神秘性”はほとんど見受けられません」、「お釈迦さま本来の教えに触れることで、老いに怯え、死に怯え、大切な人を失うことに怯える心から解放され、これからの一日一日をより価値ある日々にしていく方法を、どうか、あなた自身で見いだしてください」と書いている。たしかに本書でのアルボムツレ氏の教えは、シンプルでわかりやすい。本書のみで、上座部仏教の教えを云々するのは、早計かもしれないが、難解な大乘仏教のお経に辟易している日本人の心には、上座部仏教の教えの方が浸透しやすいのかもしれない。現実には、最近日本でも、上座部仏教＝テーラワーダ仏教がじわじわと広まっている。以下に、本書で私が参考になった箇所を書き出しておく。

- ・人生は孤独なものであり、厳しいけれどそれが現実です。現実である以上、生きていくためには、人は孤独に対する「免疫」をつけなければなりません。孤独に免疫のない人は、たとえば寂しさを感じているときに近づいてくるインチキな宗教や詐欺師、さまざまな甘い話を持ってくる人々に、ころりと騙されてしまいます。
- ・「孤独を扱う能力」がないと、人生はたいへんです。なぜなら、私たちが多くの人々から必要とされる「社会的な存在」でいられるのは、一時的なものにすぎないからです。その舞台に立てる瞬間は、人生においてはそれほど長くはないのです。
- ・人間関係というのは、楽しいだけではすまないものです。人は本来、孤独なのです。ひとりであることを「日常」にしましょう。ひとりの時間を長くとり、それを明るく楽しいものにして、たまに人に会うくらいが、本当はいちばん楽に生きられるのです。
- ・社会は、高度な道德にもとづいて管理されているわけではありません。いい加減で中途半端な個人の集まりなのです。だからお釈迦さまは、社会に認められる生き方ではなく、「理性ある人に批判されない生き方」が正しいのだと説いています。
- ・嫉妬することは、なかなかやめられません。ある意味、嫉妬は心に刺激を与える要素だからです。怒りであれ、恨みであれ、嫉妬であれ、刺激となるものに心は貪欲で、なかなか手放せないのです。
- ・死ぬのをこわいと思っていませんか。人は生きている限り、死を経験できません。死んだ経験のある人などいないわけです。経験がないことを、怖いとか怖くないとか判断できるはずがない

- のですが、それでも怖いと感じる理由は、「自分が死ぬはずがない」という意識がどこかにあるからです。もう一つの理由は、生きるのが好きだから、生きるのが好きなのは、生きていることが楽しく幸せであると思っているからでしょう。とても楽しいから、それを手放したくないのです。死を怖れる三つ目の理由は、愛する人や、地位や財産を手放したくないという気持ちです。大切な家族も、死ねば捨てなければなりません。でも、大切だから捨てたくはない。だから死にたくないと思うのです。だからこそお釈迦さまは弟子たちに、財産、地位、権力のすべてを持つことを禁じました。捨てるのがつらいのなら、捨てるものが何もない状態にはじめからしておけば、死ぬのも怖くなくなります。失うものなどないのです。
- ・いつ死んでも、自分は人生に満足しているし、後悔はない。そう思える気持ちが、幸せな死を迎えるための最大の条件といえます。

以上

---

## 中国の中・東欧協力

---

社団法人大阪能率協会常任理事、順利包装集団董事（在上海）  
福喜多技術士事務所所長、東アジアセンター外部研究員  
福喜多俊夫

中国の習近平国家主席が3月28～30日にチェコを訪問した。中国国家元首のチェコ訪問は初であり、習主席の中・東欧諸国訪問も就任後初だ。人民網（3月24日付）は、今回の訪問には重大な意義があり、中国と中・東欧の協力に再び注目が集まっていると解説した。

近年、中国と中・東欧の関係は急速に発展している。「16+1」枠組での中国—中・東欧諸国首脳会議はすでに4回成功裏に開催された。協力事務局、投資事務局、国家調整員会議、経済貿易促進閣僚級会議なども相次いで設けられた。

貿易・投資分野では、中国—中・東欧諸国間の貿易と投資は急速に拡大している。2014年に中国—中・東欧16カ国間の貿易額は2010年の439億ドルから602億ドルへと50%近く増加した。金融協力分野では、中国銀行、中国工商銀行など複数の中国系銀行が中・東欧地域に支店を設立した。中国とアルバニア、ハンガリーは通貨スワップ協定を締結。中国銀行ハンガリー支店は現地で5億ユーロの債券を発行した。

中国と中・東欧協力の活発化は、双方の利益の交わりが日増しに拡大していることによる必然的な結果だ。中・東欧は近年経済が良好に発展し、ポーランド、スロバキア、ルーマニアの2015年の経済成長率は3.5%、チェコは4.5%に達した。だが全体的に言って、中・東欧経済は貿易面でも直接投資誘致面でもドイツなどユーロ圏諸国が中心であり、依存度が80%を超える国もある。ユーロ圏は経済成長が緩慢で、中・東欧にとっては潜在的なリスクがある。中国との経済協力強化は中・東欧諸国が経済リスクを解消し、経済の多元的発展と持続可能な成長を推し進める助けとなる。中国にとっては、中・東欧はEUの大市場を背後に抱え、人件費の強みもあり、中国企業が進出するうえで理想的な場所



だ。

中・東欧 16 カ国はいずれも「一帯一路 (1 ベルト、1 ロード)」戦略の沿線国だ。中国と中・東欧の経済発展は合致度が高く、中・東欧諸国はいずれも「一帯一路」建設に大きな期待を寄せている。双方は力を合わせて「一帯一路」建設と欧州発展戦略の連結、国際生産能力協力と欧州投資計画の連結、「16+1 協力」と中欧協力の連結を推し進めることができる。

チェコは中・東欧の重要な国であり、強固な工業・科学技術基盤を持ち、中国にとっては中・東欧で第 2 の貿易パートナーだ。2015 年に両国間の貿易額は 110 億ドルに達し、中国の対チェコ投資も拡大し続けている。航空製造業、金融サービス業、物流業など「一帯一路」関連分野で双方の協力には大きな潜在力がある。習主席によるチェコ訪問は両国関係をさらに格上げし、実務協力の持続的な深まりを促進し、中国と中・東欧および欧州との関係をさらに押し上げるに違いない。

## 1. 中国と中・東欧 “16+1 協力”

第 4 回中国と中・東欧諸国首脳会議（16+1）が 2015 年 11 月 24、25 日の両日、江蘇省蘇州市で開催され、李克強総理と中東欧 16 カ国の首脳が出席した。中国による同会議の開催は今回が初めて。「16+1 協力」は、中国が ASEAN による「10+1 協力」に続き、中国が提案して実現した新たな協力メカニズムとして成功を収めつつある。

「16+1 協力」に参加している国は、アルバニア、ボスニア・ヘルツゴビナ、ブルガリア、クロアチア、チェコ、エストニア、ハンガリー、ラトビア、リトアニア、マケドニア、モンテネグロ、ポーランド、ルーマニア、セルビア、スロバキア、スロベニア、それに中国。今回の蘇州会議ではオーストリアとギリシャがオブザーバーとして参加した。イタリアも将来の参加を希望している。

2012 年 4 月に第 1 回中国と中・東欧諸国首脳会議が始動して以来、中国企業は中・東欧諸国のインフラ市場を積極的に開拓してきた。また、金融と相互投資分野での協力の勢いは良好で、中国に進出した中・東欧諸国の企業は現在、約 1000 社に上っている。

中国との経済貿易協力の拡大について、中・東欧諸国は多くの優位性がある。「一帯一路」の重要な合流地点として、中・東欧諸国の港湾設備、鉄道交通は欧州とアジアの相互連結の重要な一環になる。しかし、現実には国際金融とユーロ危機による資金不足が原因で中・東欧地域の交通、電力などのインフラ工業設備のアップグレードプロジェクトの多くが頓挫している。第 4 回（16+1 協力）首脳会議では、「新たな起点、新たな分野、新たなビジョン」が主題となった。

- ①「新たな起点」とは、中国側が初めて首脳会談を開催したことで、「16+1 協力」が過去を継承し、未来へとつなげる重要な時期にあることを指す。
- ②「新たな分野」とは、今回の会議が一連の新たな措置を打ち出し、新たな分野を切り開くことを主旨としたものであることを指す。
- ③「新たなビジョン」とは、今回の会議が今後 5 年の発展の青写真を描くものであることを指す。

今回の会議はさらに、「新たな原動力、新たなプラットフォーム、新たなエンジンを

用意するものともなった。

- ①「新たな原動力」：投資や貿易は、「16+1 協力」で最も活力に満ちた成長源である。  
例えば国際電子商取引への協力分野の拡大や「バーチャル 16+1 技術移転センター」設立の奨励・支援などの協力は、新たな成長源として「16+1 協力」の価値を高めている。中・東欧 16 カ国のうち、11 カ国は EU 加盟国であり、残りの 5 カ国も EU 加盟申請中である。今回の蘇州会議ではオーストリアとギリシャが初めてオブザーバー参加した。「16+1 協力」の求心力は高まっている。
- ②「新たなプラットフォーム」：「16+1 協力」は、中国による中・東欧諸国への投資の促進という当初のねらいを超え、金融協力での双方向的な進展ももたらし、中国、中・東欧諸国金融などの新たな融資プラットフォームの構築も進んでいる。
- ③「新たなエンジン」：相互連携・相互接続や地方協力は、「16+1 協力」の新たなエンジンとなっている。近年開通した「蘇満欧（蘇州・満州里・欧州）国際列車は、中国・欧州国際鉄道コンテナ列車建設をさらに一歩前進させ「16+1」の物流協力連合会や交通インフラ協力連合会などの形成を後押ししている。地方協力の水準も高まっている。成都とポーランドは教育協力協定、ブルガリアは「16+1 協力」の農業協調国、ハンガリーは観光協調国、セルビアはインフラ協調国となっている。  
会議後、中国と中・東欧 16 カ国は「中国・中東欧諸国協力中期計画」と「中国・中東欧諸国協力蘇州要綱」を共同で発表した。

## 2. “16+1 協力”のこれまでの成果

新華網（3 月 30 日）は「16+1 協力」のこれまでの成果について、提携の花が咲き始めたと報じた。

- ①ハンガリー・セルビア鉄道が昨年末に着工：総距離 350 キロの鉄道は中国鉄道総公司を筆頭に編成された中国企業の連合体が請け負った。
- ②中国とルーマニアは原子力発電所プロジェクトの枠組み協定で合意：中国とルーマニアはチェルナボダ原子力発電所の 3、4 号機の共同建設に関する枠組み協定で合意。契約の金額は 70 億ユーロを超え、これまでの中国と中・東欧諸国の最大の提携プロジェクトとなっている。
- ③中国がポーランドの都市洪水防止プロジェクトを近く完成：中国水利水電建設グループが建設を請け負ったヴロツワフ都市洪水防止プロジェクトが 4 月に完成する。これは中国がポーランドで初めて施行したインフラプロジェクトである。

## 3. 習近平主席のチェコ訪問の成果

新華網（3 月 30 日）は、29 日の習近平国家主席とチェコのゼマン大統領との会談の様態を下記のように伝えた。

双方は両国関係の発展を肯定的に評価し、中国・チェコ関係や中国—中・東欧諸国の協力及び共に関心を寄せる国際と地域の問題について踏み込んだ意見交換を行い、広範なコンセンサスを達成した。両国の元首は、中国・チェコ関係を戦略的パートナーシップに昇格させ、中国・チェコ関係が新たな段階に上がることを推進していくことで合

意に達した。

双方は中国の「一帯一路」の提案とチェコの発展戦略との連結を強化し、中国・チェコの協力計画綱要を共同で編成し、両国の今後一時期の実務的協力を指導する枠組みとすることで合意した。

会談後、両国の元首は「中華人民共和国とチェコ共和国の戦略的パートナーシップの構築に関する共同声明」に署名し、電子商取引、投資、科学技術、観光、文化、航空といった分野での二国間協力文書の調印に立ち会った。

人民網（3月31日）はすべての会談に同席したチェコ大統領顧問の Jan Kohout 氏のコメントを掲載し、チェコ側の会談に対する期待を伝えた。

＊両国の規模の違いにより、地方協力が双方の実務協力の分野となる。例えば四川省とモラヴィア・スレスコ州の友好関係、成都からプラハへのチャーター直行便の実現だ。毎年冬にはチェコの国民 30 万人が東南アジアへ旅行し、成都は理想的な乗り換え地となる。

＊習主席は両国の経済・貿易協力円卓会議で、両国企業による工業・科学技術パークの建設を支持する方向を打ち出した。プラハから遠くない Nymburk で、初の中国・チェコ工業パークの建設が始まる。チェコと中国はすでに小型飛行機の開発で協力を成功している。将来的にはナノテクノロジー、バイオテクノロジーの面で世界市場に向けた製品の開発面でも大きな潜在力をもつ。

＊「一帯一路」に対する認識について、チェコを含む西側には隔たりがある。このため Kohout 氏は「一帯一路」研究所（new silkroad institute Prague）を設立した。中・東欧諸国唯一の政府が支援し、「一帯一路」を専門に研究するシンクタンクだ。

＊中国・チェコ経済貿易協力円卓会議で、中国華信エネルギー有限公司と中国広核集団有限公司はチェコの Skoda Praha 株式会社およびチェコ電力工業アライアンスと、技術支援、合同投資など 4 者間の戦略協力について戦略合意を結んだ。これは中国の原子力産業が欧州大陸に進出することを意味し、大きな共同効果を生む。

以上

## 【中国経済最新統計】

	① 実 質 GDP 増加率 (%)	② 工 業 付 加 価 値 増加率 (%)	③ 消費財 小売総 額増加 率(%)	④ 消費者 物価指 数上昇 率(%)	⑤ 都市固 定資産 投資増 加 率 (%)	⑥ 貿易収 支 (億 <sup>ドル</sup> )	⑦ 輸 出 増加率 (%)	⑧ 輸 入 増加率 (%)	⑨ 外国直 接投資 件数の 増加率 (%)	⑩ 外国直 接投資 金額増 加率 (%)	⑪ 貨幣供 給量増 加 率 M2(%)	⑫ 人民元 貸出残 高増加 率(%)
2005 年	10.4		12.9	1.8	27.2	1020	28.4	17.6	0.8	▲0.5	17.6	9.3
2006 年	11.6		13.7	1.5	24.3	1775	27.2	19.9	▲5.7	4.5	15.7	15.7
2007 年	13.0	18.5	16.8	4.8	25.8	2618	25.7	20.8	▲8.7	18.7	16.7	16.1
2008 年	9.0	12.9	21.6	5.9	26.1	2955	17.2	18.5	▲27.4	23.6	17.8	15.9
2009 年	9.1	11.0	15.5	▲0.7	31.0	1961	▲15.9	▲11.3	▲14.9	▲16.9	27.6	31.7
2010 年	10.3	15.7	18.4	3.3	24.5	1831	31.3	38.7	16.9	17.4	19.7	19.8
2011 年	9.2	13.9	17.1	5.4	24.0	1549	20.3	24.9	1.1	9.7	13.6	14.3
2012 年	7.7	10.0	14.3	2.7	20.7	2303	7.9	4.3	▲10.1	▲3.7	13.8	15.0
2013 年	7.7	9.7	11.4	2.6	19.4	2590	7.8	7.2	▲8.6	5.3	13.6	14.1
2014 年	7.4	8.3	12.0	2.0	15.2	3824	6.1	0.4	4.41	14.2	12.2	13.6
1 月				2.5	19.8	319	10.5	10.8	-8.6	-4.5	13.2	14.3
2 月				2.0		-230	-18.1	10.4	1.3	4.0	13.3	14.2
3 月	7.4	8.8	12.2	2.4	17.3	77	-6.6	-11.3	6.1	-1.5	12.1	13.9
4 月		8.7	11.9	1.8	16.6	185	0.8	0.7	0.5	3.4	13.2	13.7
5 月		8.8	12.5	2.5	16.9	359	7.0	-1.7	8.4	-6.6	13.4	13.9
6 月	7.5	9.2	12.4	2.3	17.9	316	7.2	5.5	10.3	0.2	14.7	14.0
7 月		9.0	12.2	2.3	15.6	473	14.5	-1.5	14.0	-17.0	13.5	13.4
8 月		6.9	11.9	2.0	13.3	498	9.4	-2.1	5.2	-14.0	12.8	13.3
9 月	7.3	8.0	11.6	1.6	11.5	310	15.1	7.2	9.4	1.9	11.6	13.2
10 月		7.7	11.5	1.6	13.9	454	11.6	4.6	8.7	1.3	12.1	13.2
11 月		7.2	11.7	1.4	13.4	545	4.7	-6.7	-8.6	22.2	12.0	13.4
12 月	7.3	7.9	11.9	1.5	12.6	496	9.5	-2.3	6.1	10.3	11.0	13.6
2015 年	6.9	5.9	10.7	1.4	9.7	6024	-9.8	-14.4	11.0	0.8	11.9	15.0
1 月				0.8		600	-3.3	-20.0	2.2	-1.1	10.6	14.3
2 月				1.4		606	48.3	-20.8	49.8	0.1	11.1	14.7
3 月	7.0	5.6	10.2	1.4	13.1	31	-15.0	-12.9	0.3	1.3	9.9	14.7
4 月		5.9	10.0	1.5	9.6	341	-6.5	-16.4	2.9	10.2	9.6	14.4
5 月		6.1	10.1	1.2	9.9	595	-2.4	-17.7	-14.0	8.1	10.6	14.3
6 月	7.0	6.8	10.6	1.4	11.6	465	2.8	-6.3	4.6	1.1	10.2	14.4
7 月		6.0	10.5	1.6	9.9	430	-8.4	-8.2	9.6	5.2	13.3	15.7
8 月		6.1	10.8	2.0	9.1	602	-5.6	-13.9	23.9	20.9	13.3	15.7
9 月	6.9	5.7	10.9	1.6	6.8	603	-3.8	-20.5	5.2	6.1	13.1	15.8
10 月		5.6	11.0	1.3	9.3	616	-7.0	-19.0	2.5	2.9	13.5	15.6
11 月		6.2	11.2	1.5	10.8	541	-7.2	-9.2	27.7	0.0	13.7	15.3
12 月	6.8	5.9	11.1	1.6	6.8	594	-1.7	-7.6	17.2	-45.1	13.3	15.0
2016 年												
1 月			10.3	1.8	18.0	633	-11.5	-18.8	14.1	-2.1	14.0	15.2
2 月			10.2	2.3		326	-25.4	-13.8	-11.3	-1.3	13.3	14.7

注：1. ①「実質 GDP 増加率」は前年同期（四半期）比、その他の増加率はいずれも前年同月比である。

2. 中国では、旧正月休みは年によって月が変わるため、1 月と 2 月の前年同月比は比較できない場合があるので注意されたい。また、（ ）内の数字は 1 月から当該月までの合計の前年同期に対する増加率を示している。

3. ③「消費財小売総額」は中国における「社会消費財小売総額」、④「消費者物価指数」は「住民消費価格指数」に対応している。⑤「都市固定資産投資」は全国総投資額の 86%（2007 年）を占めている。⑥—⑧はいずれもモノの貿易である。⑨と⑩は実施ベースである。

出所：①—⑤は国家统计局統計、⑥⑦⑧は海関統計、⑨⑩は商務部統計、⑪⑫は中国人民銀行統計による。